

## 「高大接続テスト（仮称）を探る～高等学校教育の質の保証～」に思う

北海道旭川東高等学校

校長 小島 修 二

はじめに

「高大接続テスト(仮称)」については、昨年の平成21年度全国高等学校普通科校長会（東京）でのシンポジウムが大きな出会いであった。その後、本年1月の北海道高等学校長協会後期研究協議会における佐々木特任教授の講演、そして今回である。当初は「大学側の論理からの発想」と受けとめていたが、現在まで高校教育にまがりなりにも38年間も関わってきた自分にとっては、高校における「学力」とは何かなどを真剣に考えてみる貴重な機会となった。率直な感想も含めて意見を述べてみたい。

### 1 私の勤務する高校には学校が3つある

全日制普通科 1学年7間口 卒業生274名 センター270名受験 全て進学

定時制普通科 1学年1間口 卒業生4年11名・3年8名卒業 大学1名進学

通信制（有朋高校協力校）約170名在籍 3月に30名卒業 4月33名入学

それぞれ、学校目標があり、教職員も生徒も目標に向けて学習に取り組んでいる。

- ・ この春には、全日制ではほぼ全員が進学を目指し、センター試験も受験。  
またAO入試、推薦入試、指定校推薦、私立大学の個別入試、国公立大学の二次試験などに向けて高校3カ年間生徒も教職員も一丸となって取り組んでいる。
- ・ 定時制では、卒業の74単位を目指し、学校での日常学習に加え「高等学校卒業程度認定試験」に1年生からチャレンジして科目合格を勝ち取り、さらに「学校外学修のよる増加単位の認定」制度で英語検定や漢字検定などによる増加単位を得て、在学3年で8名が卒業した。
- ・ 通信制でも、定時制と同じく74単位を目標に在学3年で卒業して大学や専門学校に進学した者、10年もかかって卒業を勝ち得た者など、多彩である。  
\*全ての高校生に「基礎的学習の達成度を測る」必要があるのか。学ぶスタイルが多種にわたる中で、定時制や通信制に学ぶ意義は高校卒業資格を得ることが大きな目標である。（中学卒業程度で取得可能な資格は84種類であるが、高校卒業程度になると1235種類もの資格取得へ挑戦ができるらしい）  
\*5月にショックなことがあった。この春、三修制により3年間で卒業した生徒が、医療情報関係の専門学校に推薦で入学。しかし学習についていけず、1週間もたずに退学をしてしまった。「高校卒業程度認定試験」の科目合格ラインについても考えさせられた。

## 2 学習指導要領等への高校側の対応について

高校授業料の実質無償化が始まるとともに、中卒者の98%にのぼる進学率を見ても、高校が「準義務教育」であると言っても過言ではない。しかし「義務教育」とは異なり、「単位」の取得（履修と修得）が必要である。高等学校学習指導要領では、高校卒業認定に必要な必履修教科・科目と修得単位数を定めている。土曜授業のあった時代の年間登校日数は約240日、現在は約200日しかない。当然、必履修科目と卒業単位数は大きく減じられ、また「ゆとり教育」の論議があり、情報や総合的な学習の導入も始まった。特に数学・理科での基礎科目や生活科目も選択必修科目となってきた。そのため教育現場では教科書の採択に悩み、学校選択で科目を選び特色ある高校教育の名のもとに偏差値による序列化にも拍車がかかってきた。

学ぶ意欲や方法（塾・予備校）は変わり、入学時の学力差も大きくなったが全入時代では受け入れる側として対応していくしかない。

学力面ではPISAの調査結果などが示され危惧される面も多いが、大学入試に関わるセンター入試の分析などを見る限りでは、共通一次入試から約30年が経過しているが語彙力やレベルなどを比較しても大きな学力低下は見られないのではないだろうか。しかし、50%以上が大学進学をすることを考えると、「学力試験」を受けないで進学する高校生に対する学力の保証は厳しい。大学側や産業界から「大学生の学力低下」を防ぐよう高校側に対応を求められても、現状では最大限の努力をしているのが実態である。むしろ、中学までの義務教育で十分に対応できなかった学習意欲や学力の向上への取組みに対して、多様化した高校教育と表現されている現状の中で、「生きる力」の育成も含めて、個々の生徒への対応は20年前よりも一層研究され実践されていると自負している。

高校における基礎学力向上への対応はされているが、それを大学への接続ととらえて「高大接続テスト」が実施される場合に、高校生はどんな目的で受験するのか、センター試験は全国平均で41%の現役高校生が受けている。50%を超えている県が2つある。センター試験との違いが十分に理解されることが必要であり、それによって高校側の負担感も変わってくる。

## 3 大学入試と入学後の対応

学習指導要領が改訂されると、義務教育での学びの内容も変わり、高校側ではそれに対応して教育課程を編成するが、出口で「大学進学者」が50%を超えている現状では、より大学入試に合わせた教育課程を編成せざるをえない。センター試験は、一応学習指導要領に対応した科目設定がなされるが、大学側は個別入試を実施し、その要求度は旧態依然としたレベルや内容を求めている現状もある。例えば現行学習指導要領でありながら理科3科目入試も行われている。本来は授業時間数にゆとりがあれば理科3科目は理想ではあるが実際は厳しい。

A O入試や推薦入試の時期が早まっているが、3年間での学力向上を目指している高校現場にとってはこれらの入試制度は大学側の論理に基づく学生募集である。さらに、産業界では大学3年からの就職活動が当たり前になってきている。高校側が多様な中学生を受け入れて大学入試に対応してきたのと同様に、これからは大学側でも学生の就職活動を支援するキャリア教育により一層力をいれるべきではないか。

## 結びに

高校教育は多様化せざるをえない。また、高大接続の問題は「日本の教育全体」の問題でもある。しかし、学歴偏重社会が変わりつつあり、何ができるか、何をするのが求められる社会の中で、「真の学力とは何か、生きる力」が大切であると思う。

「高大接続テスト(仮称)」は集団準拠型テストではなく、目標準拠型の達成度テストであり、高校卒業資格や大学入学資格試験ではない。そのことは、高校側にとっては生徒も教員も目標にできるものであることは理解できる。「英語検定」の合格を目指すことと類似している。

大学側が求めるまでもなく、高校生として公に認知できる一つの「認定試験」であり、それがどのように活用されるかはその後の問題である。共通一次からセンター試験への衣替えについては、私学も加わるなどその活用は拡大していった。(1科目の活用など疑問点もあるが)

在学中に何回も受験でき、費用も安価で調査書にも記載されるなどといった条件を検討していく中で、「高大接続テスト(仮称)」の道は開かれると思う。「高等学校卒業程度認定試験」も現在は年2回で、受験に年齢制限もなく、マーク式でもあり、内容の合体も考えることもできるのではないだろうか。無理のない設問内容で日常の学習到達度を確認するテストであれば、高校現場に十分に受け入れられると考える。勉強をしない高校生とよく言われるが、そんな高校生の学習目標の一つになればと考える。ただ導入された場合、高校現場では、このテストへの「対策講座」などが開かれることがないことを願っている。